研修Ⅰ　高松　真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
－思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実－
「だん落とだん落の結び付きを考えながら読もう－ヤドカリとイソギンチャクー」（4年）

司会者	高・国分寺南部小	教諭
提案者	高・亀阜小	教諭
	高・香西小	教諭
指導者	高・鬼無小	教頭

1　提案の概要

(1)　高松支部国語部会の研究方針

①　研究主題　　真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
－思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実－

②　研究の視点
- どのような思考力，判断力，表現力を育てようとするのか。
- その力を育てる上で，どのような知識・技能の習得が必要か。
- 知識・技能を習得し活用するために，どのような言語活動が有効か。

↓ 実践に当たって

- ・本単元・本時で育てたい力の明確化
- ・言語活動の充実

(2)　授業実践　「だん落とだん落の結び付きを考えながら読もう－ﾔﾄﾞｶﾘとｲｿｷﾞﾝﾁｬｸｰ」（4年）

①　読むことを書く活動に生かし，児童に達成感を味わわせるために，必要な知識・技能を明確にする。
- ・　筆者の書きぶりを学ぶ支援
- ・　学んだ書きぶりを自分の説明文に生かす支援

必要かつ有効

②　子どもの問いを大切にし，思考力・判断力・表現力を育成するために，目的ある言語活動を配列した単元化を図る。
- ・　読むこと，書くこと双方で学習内容に応じたワークシートの使用
- ・　単元全体を見通し，言語活動の特徴を生かした学習の積み上げ

必要かつ有効

2　成果

(1)　読み取りの学習では，ワークシートで段落の内容を図やクイズで確かめたり，キーワードになる言葉を教師が選んで意味を丁寧に扱い，それらを手がかりにして生き物の気持ちを考えた。そうすることで，書く活動の基盤となる知識を全員が身に付け，楽しみながら内容を理解していくことができた。

(2)　読み取りの学習で詳しく内容を学んでいても，表現する力になっているとは言えなかったので，今回のように表現するという言語活動を単元の中に意図的に取り入れたことは大変価値があった。

(3)　読み取りのまとめを行うワークシートと自分の調べた生き物について書くワークシートを同じ形式にしたことで児童が見通しを持って活動できた。

(4)　ワークシートを見ながら保護者や友達に説明・発表することで学習内容を定着させたり，視野を広げたりすることができた。

3　課題

(1)　書く活動が苦手な児童へのより細かな支援の工夫が必要である。

(2)　次単元からも，教師が児童に身に付けさせたい「思考力・判断力・表現力」とそのための手立てを明確に持ち，実践を続けていきたい。

平成２２年度香小研国語部会夏季研修会　研修Ⅰ資料

真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
― 思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実 ―
「だん落とだん落の結び付きを考えながら読もう ― ヤドカリとイソギンチャク ―」（４年）

主張点

1　読むことを書く活動に生かし，児童に達成感を味わわせるために，必要な知識・技能を明確にする。

①　発達段階を捉え，教材文の特徴を生かしながら，筆者の書きぶりを学ぶ支援をする。

②　子どもの興味・関心を高めながら，学んだ書きぶりを自分の説明文に生かす支援をする。

2　子どもの問いを大切にし，思考力・判断力・表現力を育成するために，目的ある言語活動を配列した単元化を図る。

①　子どもの問いの連続性を意識し，学習内容に応じたワークシートを用いる。

②　単元全体を見通し，言語活動の特徴を生かした学習を積み上げる。

Ⅰ　高松支部国語部会の研究方針

1　研究主題について

新学習指導要領における国語科の改善の基本方針

言葉を通して的確に理解し，論理的に思考し表現する能力，互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや，我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむこと

↓ 各領域で，国語の能力を調和的に育て，実生活で生きて働くように内容の改善

○　学習過程を明確化した指導事項
○　実生活の様々な場面における具体的な言語活動

↓

言語活動の充実

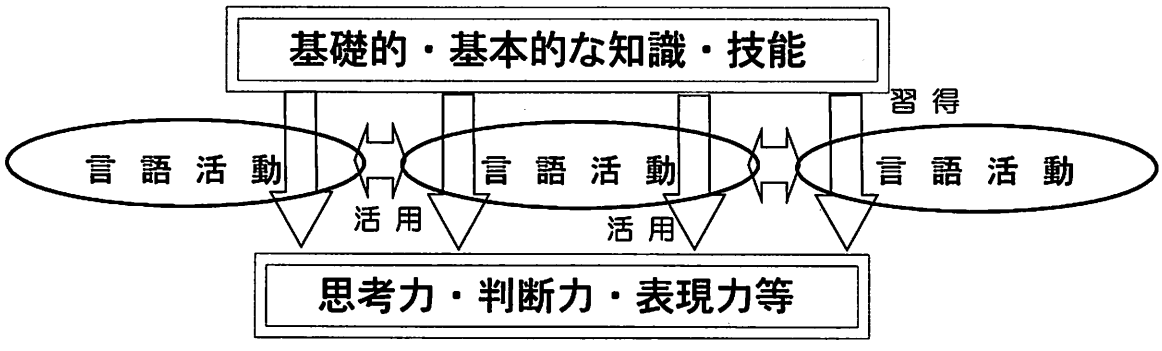
「生きる力」
①　基礎的・基本的な知識・技能の習得
②　知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
③　学習意欲

↓

思考力・判断力・表現力等の基礎となる言語能力の育成

有機的な結び付き

2　研究の視点について



研究の視点

① どのような思考力，判断力・表現力を育てようとするのか。
② その力を育てる上で，どのような知識・技能の習得が必要なのか。
③ 知識・技能を習得し活用するために，どのような言語活動が有効であるか。

(1) 本単元・本時で育てたい力の明確化

身に付けさせたい知識・技能 ＝ 書く技能

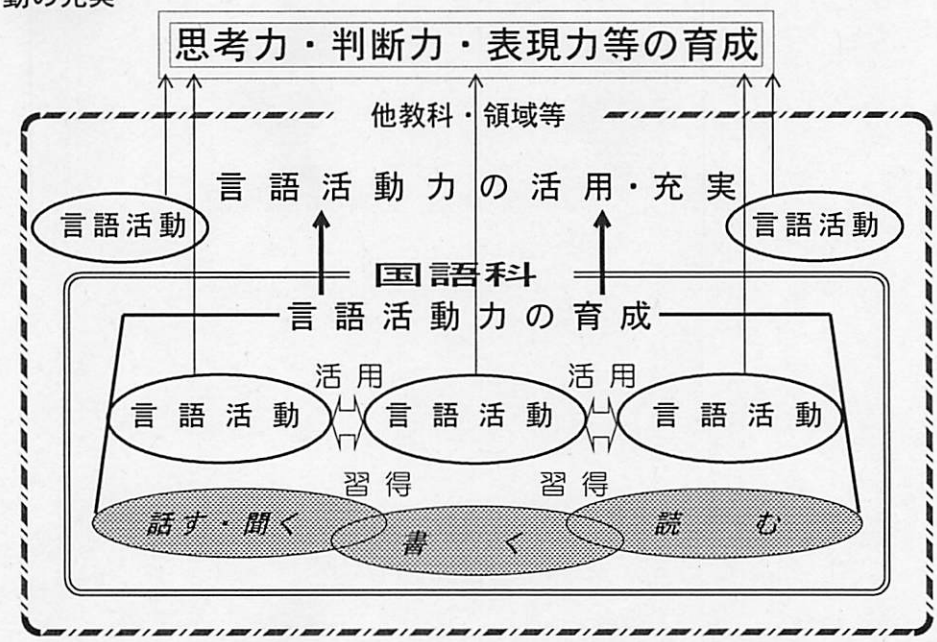
正確に読み取る力
読み取った情報の表し方や意味を理解する力

活用↓　↑習得

多様な表現活動

それぞれの活動における**具体的な能力の的確な把握**が必要
（教材研究や，学習指導要領で示された指導事項をふまえて）

(2) 言語活動の充実



言語活動の充実のために

- 目的がはっきりとしており，単元や授業の見通しがもてる。（学習過程が明確である。）
- 児童主体の，児童の思いを実現するために必然性がある。
- 教材の特徴や特性が生かされている。
- 学校・児童の実態に応じている。

3　研修の進め方

第１回研修会（６月１７日）　…授業をもとに，研究を深める。

⇓

夏季研修会（７月２３日）　…各ブロック代表による第１回研修会の報告及び協議により，ブロック毎の研修を共有する。

⇓

第２回研修会（１１月１８日）　…第１回研修会，夏季研修会の内容を受けて提案される授業をもとに，研究を深める。

＜討議の観点＞

○　単元・授業の中で身に付けさせようとした知識・技能について
　…学年の発達段階や系統性をふまえた知識・技能を身に付けさせようとしていたか
○　知識・技能を身に付けさせるための支援について

…児童の主体的な学習活動となったか
学習単元の組み方，言語活動はどうだったか

○　評価について
…児童の自己評価，相互評価はどうだったか
指導と評価の一体化に基づく教師の評価が行えたか

4　研修会（第１回・第２回）の進め方

授業 → 討議 → 授業者に対するコメントカード

授業者による授業説明 ⇒ グループ ⇒ 全体 ⇒ 指導
研究部提案　　討議　　交流

○　明日の授業実践に生きる，ヒントを得られる研修会に
○　受け身型ではなく，参加型の研修会に

Ⅱ　第１回研修会の授業実践

1　単元「だん落とだん落の結び付きを考えながら読もう」と研究主題の関連

研究主題：真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
サブテーマ：― 思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実 ―

↓ 具現化

単元化による明確な学習過程

目的をもった読み：「段落と段落の関係を捉え，それを生かして説明文を書こう。」＝意欲化
見通し

ワークシートの効果的な活用

児童の思いを実現する必然性：「説明内容（関係性）を正確に読み取りたい。」
「筆者の書きぶりを学びたい。」＝教材の特徴を生かす

＝学校・児童の実態に応じて

表現（説明文）：「筆者の書きぶりをまねて，助け合う生き物たちを紹介しよう。」＝児童主体

「言語活動の充実」のための条件を取り入れて

↓

思考力・判断力・表現力等の育成

2　本単元における主張点

(1)　読むことを書く活動に生かし，児童に達成感を味わわせるために，必要な知識・技能を明確にする。

①　発達段階を捉え，教材文の特徴を生かしながら，筆者の書きぶりを学ぶ支援をする。

ア　発達段階（中学年）を捉える（新学習指導要領解説・国語編より）

＜書くこと＞　※　本単元との関連部分を抜粋

課題設定や取材に関する指導事項	関心のあることなどから書くことを決め，相手や目的に応じて，書く上で必要な事柄を調べること。
構成に関する指導事項	文章全体における段落の役割を理解し，自分の考えが明確になるように，段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。
記述に関する指導事項	書こうとすることの中心を明確にし，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。 文章の敬体と常体との違いに注意して書くこと。

交流に関する指導事項	書いたものを発表し合い，書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。

＜読むこと＞　※　本単元との関連部分を抜粋

説明的な文章の解釈に関する指導事項	目的に応じて，中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考えて読むこと。
自分の考えの形成及び交流に関する指導事項	目的や必要に応じて，文章の要点や細かい点に注意しながら読み，文章などを引用したり要約したりすること。 文章を読んで考えたことを発表し合い，一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。
目的に応じた読書に関する指導事項	目的に応じて，いろいろな本や文章を選んで読むこと。

イ　教材文の特徴を生かす

説明文の基本構成	序論 → 本論 → 結論
段落相互の関係の明示	つなぎの言葉　　例.「では」「しかし」「このように」等
読者を引き付ける工夫	問い → 実験・観察 → 答え
分かりやすく説明する工夫の例	・　ヤドカリがイソギンチャクを付けていない場合と付けている場合の対比 ・　図や写真と文章との対応

論理的思考力を高めるために必要な知識・技能

低学年	順序性の思考
中学年	比較・関連付けの思考
高学年	多面的な思考

…発達段階と教材文の特徴から重視

↓

本単元での言語活動にも取り入れ，連続的かつ螺旋的に身に付けさせたい知識・技能の中心

「互いに助け合う生き物について家の人に分かりやすく伝える説明文を書くために，筆者の書きぶりを学びたい」という目的や願いに応じて，発達段階及び本教材文の特徴をおさえた学習活動を展開することにより，基礎的・基本的な知識・技能を明確にし，筆者の書きぶりを学ぶ支援が必要かつ有効になる。

②　子どもの興味・関心を高めながら，学んだ書きぶりを自分の説明文に生かす支援をする。

ア　子どもの興味・関心を高める

目的に応じた読書や調べによる情報の収集 ⇒ 情報の選択・活用

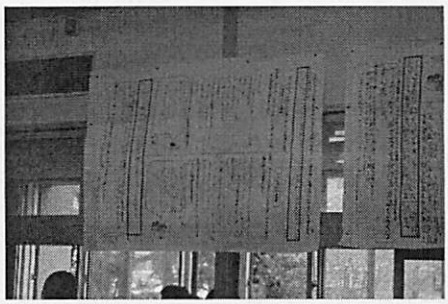
読むときと同じ形式のワークシートに情報の整理

→他の生き物についても「いない場合といる場合の対比」が分かる共生関係の資料を用意

イ　学んだ書きぶりを生かす

○　既習のワークシートをもとに書きぶりをふり返る場の設定

○　書きぶりの学びを思い出す教室環境



「互いに助け合う生き物について家の人に分かりやすく伝える説明文を書くために，筆者の書きぶりを学びたい」という目的や願いに応じて，本教材文の特徴（共生相手がいない場合といる場合の対比を中心に）をおさえた学習活動を展開することにより，基礎的・基本的な知識・技能を明確にし，筆者の書きぶりを学ぶ支援が必要かつ有効になる。

(2) 子どもの問いを大切にし，思考力・判断力・表現力を育成するために，目的ある言語活動を配列した単元化を図る。

①　子どもの問いの連続性を意識し，学習内容に応じたワークシートを用いる。

ア　子どもの問いを把握し，答えを出すとともに次の問いへとつなぐ場面を用意する

筆者の書きぶり　「問い」→「説明」→「答え」 ➡ 「問い」→「説明」→「答え」…

⇩

児童の学び	教材文　教材文　教材文 … ○段落　○段落･絵　○段落	資料　資料　資料 題名　写真　の文	友達の　友達の　友達の 説明文　説明文　説明文

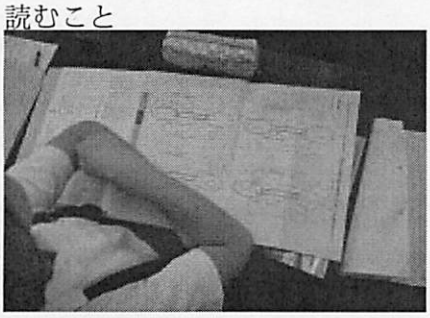
問い（説明→思考）答え･問い…問い（説明→思考）答え･問い（説明→思考）答え

イ　発達段階（中学年）と教材文の特徴を言語活動に生かす

＜書くこと＞言語活動例　※　本単元との関連部分を抜粋

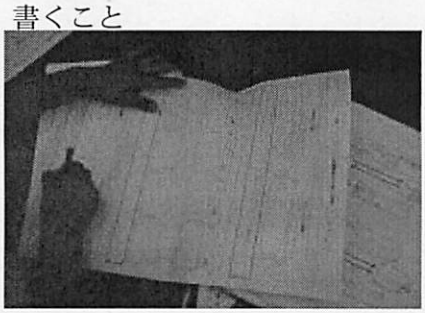
収集した資料を効果的に使い，説明する文章などを書く言語活動

読むこと



読むときと同じ形式のワークシートに説明文を書く

書くこと



「互いに助け合う生き物について家の人に分かりやすく伝える説明文を書くために，筆者の書きぶりを学びたい」という目的や願いに応じて，本教材文の特徴（共生相手がいない場合といる場合の対比を中心に）をおさえた学習活動を展開することにより，基礎的・基本的な知識・技能を明確にし，筆者の書きぶりを学ぶ支援が必要かつ有効になる。

第４学年２組　国語科学習指導案

研究主題
真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
～思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実～

１　日　時　　平成２２年６月１７日（木）第５校時

２　単元名　　だん落とだん落の結び付きを考えながら読もう（中心教材「ヤドカリとイソギンチャク」）

３　単元について

（１）教材について

平成２０年に新学習指導要領が公示され，「思考力・判断力・表現力を児童に身につけさせる」ことが大きな柱として提示された。思考も判断も表現も言語によって行われるため，言語を扱う国語科の果たす役割は大変大きい。このことは，本部会でも研究の中心にされていることである。中でも説明的文章は，整然とした論理によって組み立てられた文章であり，内容だけにとどまらず，筆者の論理的な思考方法・表現方法を学ぶことは大変意義のあることである。

本教材「ヤドカリとイソギンチャク」は，ヤドカリとイソギンチャクが互いに助け合って生きている様子を，実験や観察を引用しながら分かりやすく書いている説明的文章である。理科や総合的な学習で，生き物の相互関係について学習している児童にとって，関心の高い内容と言える。また，自分を中心とした人間関係から抜け出し，周囲との関係について考えなければならない時期にある４年生にとって，一方向の関係だけでなく，双方向の関係を捉え，「互いに助け合って生きている」という関係性について述べている本教材は，内容的にも大変価値のあるものである。

学習指導要領「C　読むこと」の領域の中学年（２）内容には，「イ　目的に応じて，中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え，文章を読むこと」とある。本教材は本論で３つの問いと答えという構成が用いられており，意味段落が把握しやすく児童が段落相互の関係をつかみやすい文章である。さらに，問いを持ち，それを解決するための実験や観察をし，答えを導き出すという論理の流れは，他教科にも実生活にも生きる思考方法である。児童がこれを理解し，身に付けることこそ，真に生きて働く国語力，すなわち思考力・判断力・表現力を身に付けることに他ならないと考える。今回は読み取りを重点的に行った上でさらに書く活動を入れることで，段落相互の関係を捉え，その中の論理を定着させたい。

（２）単元と出会う前の児童の実態

本学級の児童は，国語の好き嫌い，得意不得意，読み取りの能力に個人差がある。さらに物語の学習は好きだが説明文の学習は苦手という児童もいる。そのため，３年生の段階から段落の大まかな内容やそのつながりを把握したり，意味段落の内容を確認して読み取りの学習を行ったり，一人一人が確実に理解できるような授業展開を工夫してきた。児童が思考方法や表現方法を身に付けられるように，国語科に限らず，「まず，次に，最後に」といった時系列を表す接続語を使って説明したり，「なぜなら，その理由は」などのような接続語を使って原因と結果を把握したりする活動も繰り返し行ってきた。また，児童一人一人が自分の考えを表現する機会が持てるように，ワークシート等を利用して書く活動も取り入れてきた。これらを継続して行うことにより，時系列に沿って説明したり，事柄を因果関係で捉えたりすることができるようになってきた。また筆者の使う言葉に着目して，友達と意見を交流しながら意

図や思いに迫る学習ができるようになり，短く意見を書くことは大部分の児童ができるようになってきた。

しかし，これまで扱ってきた時系列や因果関係以外の思考方法は，児童には馴染みが薄い。加えて長い文章を書く力については，段落構成を意識しないまま書き始める児童が多く，順序性や目的・相手意識などの薄いことが課題として挙げられる。３年生では，はじめ（序論），なか（本論），おわり（結論）の展開を意識して文章を書く学習を行ったが，十分定着しているとは言えない。

（３）「自分に問い，人に問い，自分を信じる」児童を育てる学習をこう考える

①思考力・判断力・表現力を高めるための言語活動

ワークシートを使った二者の関係をとらえる思考体験

本教材「ヤドカリとイソギンチャク」は３つの問いと答えにより，相利共生という関係性を捉えた文章である。筆者は第一に，イソギンチャクが付いている場合と付いていない場合，第二に両者が離れている場合，第三にヤドカリに付いている場合と付いていない場合とで実験・観察を行っている。筆者はヤドカリとイソギンチャクが一緒にいる場合と一緒にいない場合を比較し，関係性を捉えることで，互いが互いにとって必要不可欠な存在であること明らかにしている。この方法は，二者の関係を捉える際の基本的な考え方である。

さらに，関係性を構成の面から見ると，筆者はどちらの場合もイソギンチャクが付いていない場合を先に述べ，付いている場合をその後述べている。これは一緒にいる場合の利点をより強調できる効果的構成と言える。

こうした構成は，この説明的文章の特徴と言え，二者間の関係について思考する方法を学ぶには適している。

そこで，本時では，二者の関係が明確であり，児童もよく知っている題材を提示し，この思考方法に沿って関係性を捉え，それを表現させることで，これまでの児童の生活にあまり馴染みのない思考方法を学ばせ，定着させようと考えている。

つまり，本単元で取り組みたい言語活動の１つ目は，学習指導要領「C 書くこと」中学年の（２）内容，「イ　文章全体における段落の役割を理解し，自分の考えが明確になるように，段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」の内容を身に付けることである。またこれは，中学年「書くこと」の言語活動例にある，「イ　疑問に思ったことを調べて，報告する文章を書いたり，(略)」「ウ　収集した資料を効果的に使い，説明する文章などを書くこと」とも関連させている。

学習に当たっては，どの児童にも思考方法（表現）に沿って学べるように，読み取りの学習で学んだ構成と同じ構成のワークシートを用いる。

一人一人が確実に内容を理解するための言語活動

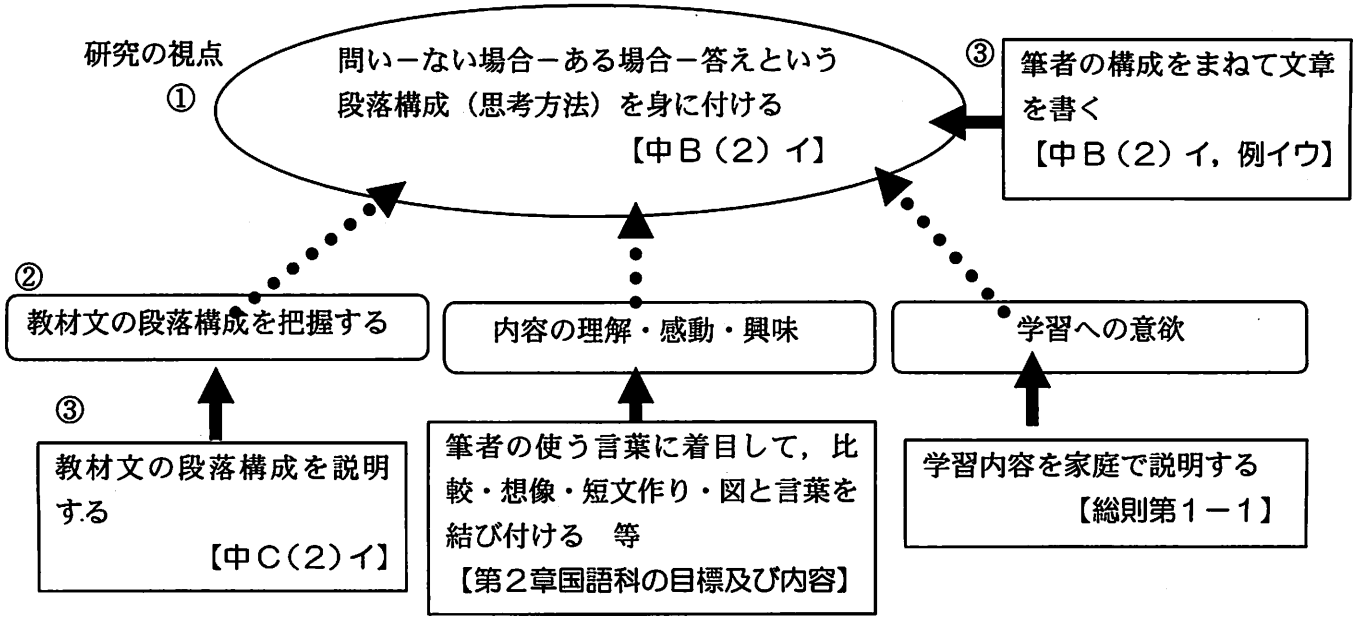
本時のねらいである筆者の構成（問い－ない場合－ある場合－答え）を身に付けさせるために，単元全体で行う言語活動は以下の通りである。

まず，筆者の構成を把握し説明するという言語活動である。単元の始めに，筆者の文章構成について説明する。意味段落ごとのまとまりに題を付けたり，接続語等を使ってそれらをつなげたりして，友達や家の人に説明することで，筆者が意図した文章構成をしっかりと身に付けさせたい。この学習活動を行うことで，事柄の順序性，大体の内容，段落相互の関係や筆者の論の進め方等をつかむことができる。このことは，学習指導要領「C 読むこと」中学年の（２）内容，「イ　目的に応じて，中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え，文章を読むこと」と密接に関わるものであり，日常的に生かすべき重要な内容であると考えている。

次に，文章中に表現された，理解に深く関わる言語を学ぶことである。それら言語は，児童一人一人が確実に内容を理解していなければならないものである。そのような言語を学ぶために，教材文中の中心となる語や文に着目させ，印象からイメージをふくらませ，感覚的に比較したり，図と言葉を結び付けたり，意味調べや短文作りをしたりして，生き物の気持ちを考えさせ，文章全体の論理性と結び付ける学習をする。このことは，学習指導要領の「国語科の目標及び内容」の「説明的な文章の解釈に関する指導事項」の「内容や表現を想像や分析，対照，推論などによって相互に関連付けて読んでいく。（中略）書き手の意図を推論したりしながら（略）」という箇所に合致し，豊かな言語活動が可能になると考えている。

そして，学習の内容を家庭で説明する言語活動である。児童が，学習を楽しく意欲的に取り組んでいくことは，学習の基盤である。児童の学びを学校だけでなく，家庭でも支えることで児童の意欲向上，学習習慣の定着などが期待される。毎日の学習後，ワークシートを持ち帰り，本日の学習内容を家庭で説明するようにし，それに対する保護者からの励ましや称賛の言葉をもらう。このことは学習指導要領の総則の「児童の発達の段階を考慮して，児童の言語活動を充実するとともに，家庭との連携を図りながら，児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。」という記述と関わるものである。

こうした学習によりさらなる言語活動能力の定着が図れるものと考える。以上のことを図示すると下のようになる。（研究の視点は，香小研高松支部国語部会研究方針を参照）



（２）学習前と学習後の児童の姿の変容

本単元の学習後には，児童に次の２つの点で変容を期待したい。

１点目は，筆者の思考方法に沿って書く活動を通して，ものの関係性を捉える思考を定着させるということである。問いを持ち，それを解決するために方法を考え，そして答えを導く，という思考方法や，ある場合とない場合の対比は，理科や社会などの他教科や日常生活でも生きて働く考え方である。さらに，児童がこの先出会う様々な人や物との関係性を築く際の糧になるだろうと期待している。

２点目は，自然の中の共生という生き方を知ることで，生命のたくましさや生きる知恵を感じるということである。６月は本校で「いきいき月間」として，生命のすばらしさを感じられるような学習を進めている。それと関連して，お互いの関係性や相利共生について考える機会にしたい。

4　単元の目標

単元を通して付けたい力	内容	【関・意・態】	○筆者の文章構成を参考にして，進んで自分の身の回りの二者の関係を考えようとしたり，その関係性について文章に書いていこうとしたりする。
		【話・聞】	○話し合いの流れに沿って，自分の意見を発表したり，友達の意見を聞いたりする。
		【書】	○筆者の段落構成や自分の書いた文章を，段落構成や問いと答えの論述の仕方を意識しながら説明する。 ○自分が選んだ身の回りの二者の関係について，段落構成を考えて書く。
		【読】	○本文中の大事な言葉を手がかりに，内容を理解したり筆者の意見を読み取ったりする。 ○どんな問いに対して，どのような方法でどんな答えを導き出しているのかを明らかにしながら読む。
		【言】	○筆者の使う言葉とその言葉に込められた筆者の思いを結び付けながら，語感や言葉の使い方に関する感覚を養う。
	問う力		○　何かの関係を捉える際には，ある場合とない場合を比較するという方法があり，それを問いーない場合ーある場合ー答えの段落構成で表現すると分かりやすいということが分かり，その段落構成を身に付ける。

5　単元計画と評価基準

次	時	学習活動	評価基準
一次　教材文を読もう	1 2 3	全文を通読し，様々な言語ゲームを行うことで内容の大体を把握すると共に，学習課題や文脈を作る。 （家庭学習） ア　難語句・重要語句の意味調べ イ　本文の穴埋め （授業） ウ　段落構成の説明 エ　学習課題づくり	ア【関・意】【言】 ２：正しく意味調べができる。 ３：文脈に沿って正しい意味を捉えることができる。 イ【関・意】【読】 ２：本文を最後までじっくり読みながら，正しく穴埋めができる。 ３：本文を最後までじっくり読みながら正しく穴埋めをし，文章の大体の内容を把握することができる。 ウ【読】【話・聞】 ２：友達の考えを聞きながら段落構成図を完成させ，それに沿って説明することができる。 ３：意味段落の内容を捉え，自分で段落構成図を完成させることができる。また，それを説明することができる。 エ【関・意】 ２：自分自身を振り返りながら，学習課題を作ろうとすることができる。 ３：自分自身を振り返りながら，学習課題を作ろうとすることができる。さらに，その学習課題が自分にとってどのような価値があるのか考えることができる。 あしあとカード１

<table>
<tr><td rowspan="3">二次
教材文を叙述に即して詳しく読もう</td><td>4</td><td>１つ目の問い「なぜヤドカリはいくつものイソギンチャクを貝がらにつけているのでしょうか。」について詳しく読み取る。</td><td rowspan="3">【読】【書】【話・聞】
２：意味段落に書かれている内容を理解し，大事な言葉を手掛かりにしながら，筆者の書いている内容を友達の意見も参考にしながらまとめ，説明することができる。
３：意味段落に書かれている内容を理解し，大事な言葉を手掛かりにしながら，筆者の書いている内容を自分でまとめ，説明することができる。

あしあとカード２</td></tr>
<tr><td>5</td><td>２つ目の問い「ヤドカリは石に付いたイソギンチャクをどうやって自分の貝がらにうつすのでしょうか。」について詳しく読み取る。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>３つ目の問い「イソギンチャクは，ヤドカリの貝がらに付くことで何か利益があるのでしょうか。」について詳しく読み取る。</td></tr>
<tr><td></td><td>7</td><td>これまでの学習を，初めに作った学習課題と照らし合わせながら振り返る。</td><td>【関・意】
２：これまでの学習を振り返って読後の感想をまとめることができる。
３：これまでの学習を振り返って，読後の感想をまとめることができる。その際，この学習が自分自身にどう生かしたいか考えることができる。</td></tr>
<tr><td>三次
教材文を参考にして文章を書こう</td><td>8
9</td><td>自分の選択した２者の関係性について，本文の思考方法を参考にして文章を書く。
（本時）</td><td>【関・意】【読】
２：図書資料などから，共生の関係にある生き物を進んで探すことができる。
３：図書資料などから，共生関係にある生き物を進んで探し，それを図に正しく表そうとする。
【書】
２：自分の選択した２者の関係を，問い－ない場合－ある場合－答えという段落構成を意識して，一方のことについて文章を書くことができる。
３：自分の選択した２者の関係について，問い－ない場合－ある場合－答えという段落構成を意識して両者のことについて文章を書くことができる。
あしあとカード３</td></tr>
</table>

6　本時の学習

（1）目　　標　（内　容）自分の選択した二者の関係について問いと答えという段落構成を意識し，本文の思考方法を参考にして文章を書くことができる。

（問う力）何かの関係を捉える際には，ある場合とない場合を比較するという方法があることを知り，その思考方法に沿って自分の選んだ二者の関係について書くことができる。

（2）学習指導過程

学習活動	問い続ける児童の意識と認識の過程	段の場	期待される教科の表現力	思考力・判断力・表現力を高める教師の支援
1　本文の問いとその答えへの迫り方を確認する。	武田さんは3つの問いと答えでヤドカリとイソギンチャクのことを教えてくれていたね。 1つ目はイソギンチャクがいる場合といない場合を比べていたね。 2つ目はヤドカリとイソギンチャクを離して観察をしていたよ。 3つ目はヤドカリに付いている場合と付いていない場合を比べていたよ。 他にもたくさんの生き物や物が関係しあって生きているね。 わたしたちも生き物や物の関係について，武田さんのように書いてみたいな。	問いをつくる	・武田さんはヤドカリとイソギンチャクのことをよく調べて，実験もして詳しく書いてくれていました。 ・武田さんは離れている場合も一緒にいる場合も，両方書いてくれていたので，分かりやすかったです。 ・武田さんの文章は，問いと答えという書き方をしてくれていたので，おもしろいと思って読めました。 ・わたしも，武田さんのように何かと何かの関係について考えて，分かりやすく書いてみたいです。	○各意味段落の問いと答えを文やイラストで板書に示しておく。そうすることで，実際に自分が書く活動の際の参考になるようにする。 ○すぐに書く活動に移れるように，前時までにヤドカリとイソギンチャクのような共生関係になる生き物の調べをし，それを図に表してメモしたり掲示したりしておく。
2　本時の学習課題を作る。	わたしは，イソギンチャクとクマノミことについて書いてみたいな。 ぼくは，ダテハゼとテッポウエビが助け合っていることについて書くよ。 ぼくは，アリとアブラムシの関係について書いてみようかな。 わたしも武田さんの分かりやすい書き方を使って書いてみよう。 ［　　］と［　　］がいっしょにいることについて 武田さんの分かりやすい書き方を使って書こう。	文脈をつくる	・ダテハゼとテッポウウオも互いに助け合って生きていると思います。 ・ダテハゼはエビが作った巣穴に一緒に入って敵から身を隠します。エビは視力が悪いので，ダテハゼに敵を見つけてもらうのだそうです。 ・アブラムシは，葉から栄養を吸い取ってアリに分ける代わりに，アリに守ってもらっていると思います。 ・これらの生き物はヤドカリとイソギンチャクと同じ関係なので，武田さんの分かりやすい書き方を使って書けそうです。	○例に挙げた生き物の関係を，矢印を使って図化して板書に表すことで，相利共生の関係を把握できるようにする。 ○教室に共生について紹介している図書資料を用意しておく。自分のメモだけでは詳しい内容が分からずに困っている児童には，それを見ながら書くよう助言する。
3　自分が選択した二者の関係について書く。	アブラムシとアリが一緒にいることについて紹介します。 アブラムシはなぜアリと一緒にいるのでしょうか。 アブラムシがアリと離れている場合のアブラムシの気持ちを考えてみましょう。 「テントウムシがやってきたぞ。このままでは食べられてしまう。あんなに体の大きいテントウムシに，ぼくたちがかなうはずないよ。」 しかし，アブラムシがアリと一緒にいる場合のアブラムシの気持ちを考えてみましょう。 「テントウムシがやってきたって怖くないぞ。なんたってぼくたちにはアリがついてくれているんだ。アリがぼくたちを守ってくれるよ。ありがとう，アリたち。」 このように，アブラムシはアリと離れていると，テントウムシなどの敵に襲われてしまいますが，アリと一緒にいると，身を守ることができるのです。 では，アリはアブラムシと一緒にいることで何か利益があるのでしょうか。 アリがアブラムシと離れている場合のアリの気持ちを考えます。 「おなかがすいたなぁ。甘くて，おいしい，あの甘露がほしいなぁ。甘露はぼくたちの大好物なんだ。あれがないと，力が出ないよ。動き回ったりえさを運んだりすることができないよ。」 しかし，アリがアブラムシと一緒にいる場合のアリの気持ちを考えてみましょう。 「アブラムシがくれる甘露を食べると，元気が出るよ。これでしっかり働くことができる。いつもありがとう。その代わり，敵が来たときはぼくたちが守ってあげるからね。安心して。」 このようにアリはアブラムシと離れていると，大好物の甘露を食べることができませんが，アブラムシと一緒にいると甘露を食べることができます。 このようにアブラムシとアリは互いに助け合って生きているのです。	自分に問う	●身に付けさせたい表現・構成● ・「～でしょうか。」という問いと答えの文 ・問い－離れている場合－一緒にいる場合－答えという段落構成 ・一方の場合の利益－他方の場合の利益という段落構成 ・話題転換や比較するためのつなぎの言葉（では，しかし）	○各段落に何を書けばよいのかを意識できるように，教材文を参考にしながら，書く順番や内容を板書しておく。 ○まずは問いの部分を書くようにすることで，全体の内容や順序を意識しながら書き進めることができるようにする。 ○自分の選んだ生き物の関係を対比しながら書くためには，1つ目と3つ目の段落を使って書くことを確認する。2つ目の問いの段落については，現在の調べの状態では書くことができない場合もあることを確認し，それだけ筆者が丁寧に観察・実験を行ってこの説明文を書いているということに気づけるようにする。 ○書くことが難しい児童には，ワークシートを折って使うなどして，書く順番を明確にしたり書く意欲を引き出したりする。 ○ある程度想像で文章を構成していることに触れ，教材文のような断定の文末を避けることで，正確に文章を表そうとする態度を養えるようにする。
4　友達と文章を読み合い，感想を述べ合う。	武田さんの書き方を参考にして文章が書けたよ。わたしの文章を友達に読んでほしいな。 ○○さんの文章も2つの生き物の関係がよく分かるね。	人に問う	・○○さんは，ぼくと違ってアリとアブラムシのことについて書いていました。ぼくはアリとアブラムシが助け合って生きているということは知りませんでしたが，○○さんの文章を読んでよく分かりました。 ・○○さんとわたしは同じダテハゼとテッポウエビを選んでいました。○○さんの文章も，ダテハゼとテッポウエビの関係をうまく説明していました。	○ワークシートはそのまま音読し説明できるようにしておき，書けた児童から友達と交流できるようにする。そうすることで，この思考方法のよさを実感できるようにする。交流する際には，筆者と同じ段落構成で書けているか確かめながら聞くようにする。
5　本時の学習を振り返り，あしあとカードを書く。	生き物たちの中にはこうやって助け合って一生懸命生きているものがいるんだね。そのことを，武田さんの書き方を参考にして書くと，関係がよく分かったし，上手に説明することができたよ。	認識する		

（3）評　　価　自分の選択した二者の関係について問いと答えという段落構成を意識し，本文の思考方法を参考にして文章を書くことができたか。

7　実践に取り組んで

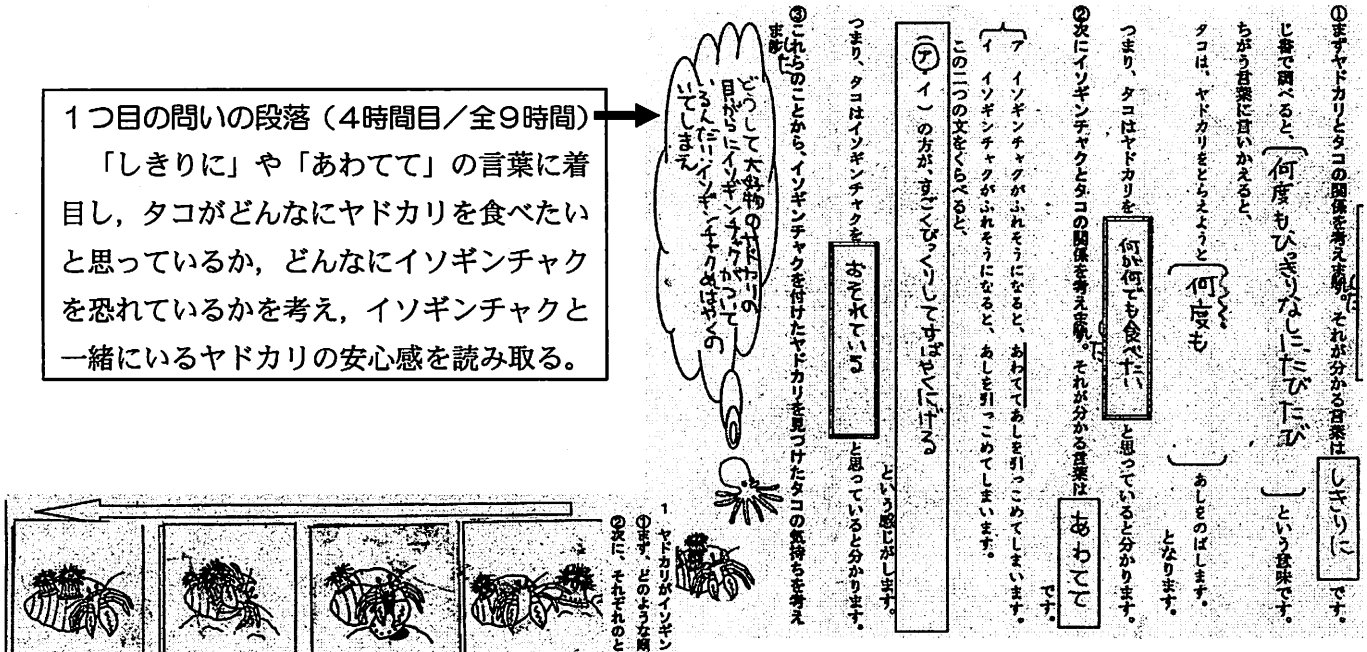
本単元の学習を通して得られた成果と課題を以下に示す。

（1）書く活動の基盤となる知識を全員が身に付けるための読み取りの学習

読み取り学習では，全員が確実に内容を理解するとともに，楽しんで学習できるように工夫した。毎時間の音読後に学習する段落の内容を図に表したり，クイズ形式で確かめたりして書かれている内容を理解して臨めるようにした。また，読み取りのキーワードになる言葉や筆者の意図がよく表れている言葉を教師が選んで意味を丁寧に扱い，それらを手がかりにして生き物の気持ちを考えた。こうすることで，児童が楽しみながら着実に内容を理解していくことができた。

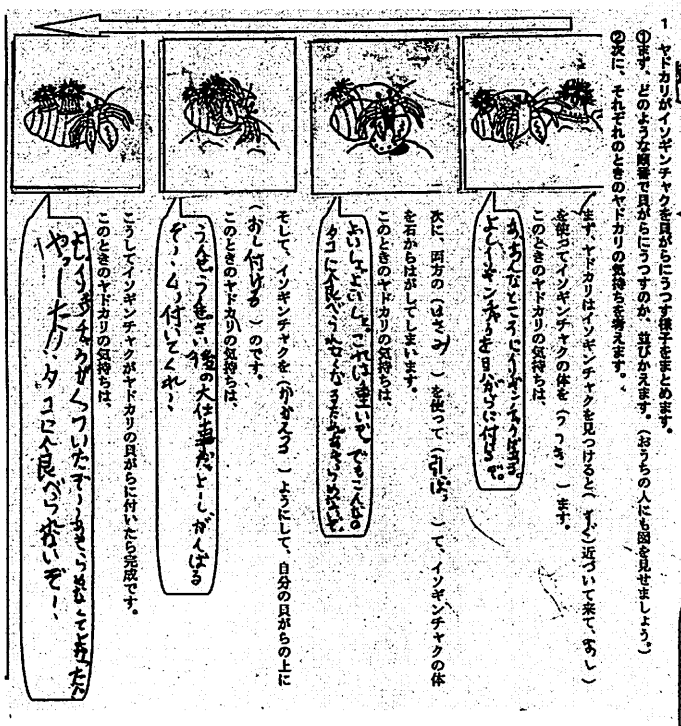
1つ目の問いの段落（4時間目／全9時間）

「しきりに」や「あわてて」の言葉に着目し，タコがどんなにヤドカリを食べたいと思っているか，どんなにイソギンチャクを恐れているかを考え，イソギンチャクと一緒にいるヤドカリの安心感を読み取る。



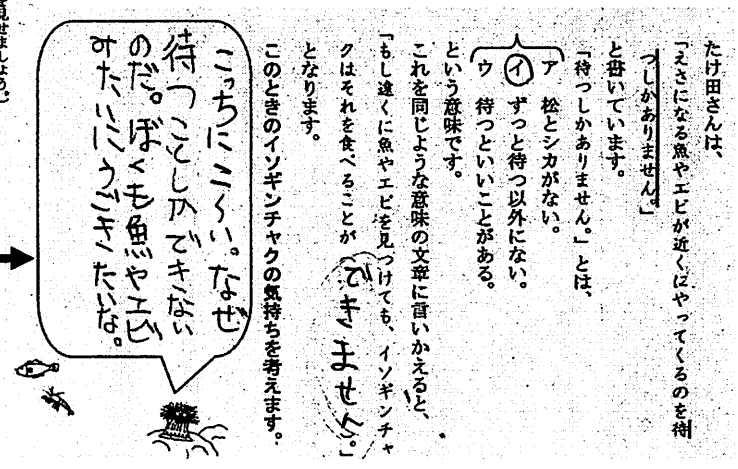
2つ目の問いの段落（5時間目／全9時間）

本文の言葉を手掛かりにしながら，ヤドカリがイソギンチャクを貝殻に移す手順の絵を並べ替える。そしてそれぞれの段階のヤドカリの気持ちを想像することで，イソギンチャクが必要不可欠な存在であることを読み取った。



3つ目の問いの段落（6時間目／全9時間）

「待つしかありません。」という言葉を言い換えて意味を確認し，ヤドカリに付いていないイソギンチャクの「食べたいのに食べられない」という様子を読み取った。

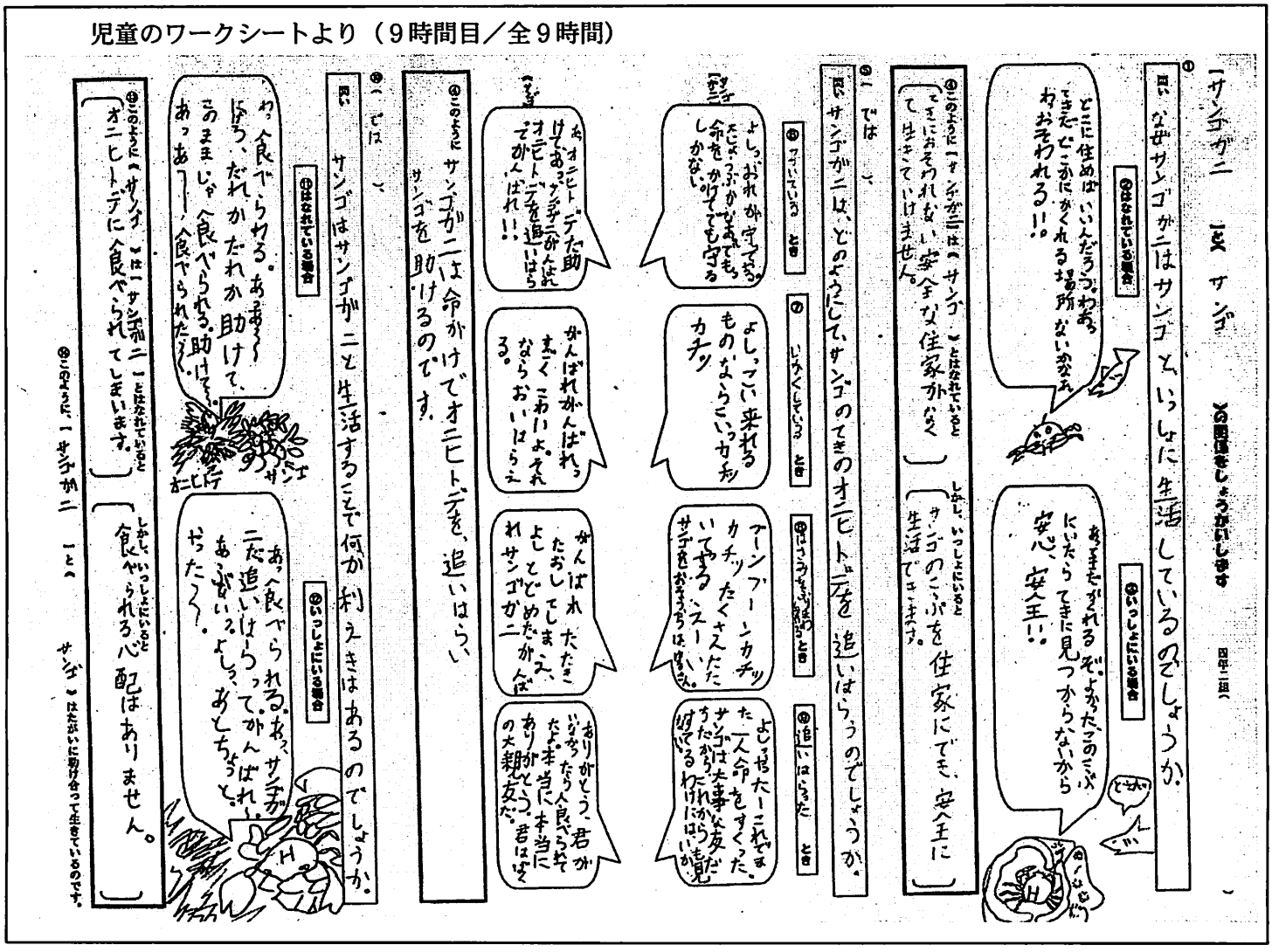


（２）思考力・判断力・表現力を身に付けさせるための目的ある言語活動の単元化

今回は，二者の関係を捉えるための段落構成（思考方法）を身につけさせたいと考え，児童が自分で調べた生き物について，問い－離れている場合－一緒にいる場合－答えという筆者の書きぶりをまねて書く活動を単元に取り入れた。本時では，１つ目の問いを書く段階から，何をどのように書いていいのか分からず，ずいぶん苦戦していた。そのつまずきを詳しく見るとほとんどの児童が「なぜクマノミ**は**イソギンチャク**と**いっしょにいるのでしょうか。」という問いを作るところを，「なぜクマノミ**と**イソギンチャク**は**いっしょにいるのでしょうか。」といった問いを作っていたのである。筆者が２つの生き物の利益を別々にして段落を分けて書いており，その段落構成が分かりやすいということを学んでいても，いざ書く段階になるとその学習を生かせていなかったのである。

このことについての支援が不十分であったことは私の反省として挙げられる。しかし，逆に言えば，どんなに読み取りの学習で詳しく内容を学んでいても，表現する力になっているとは言えないということである。読み取りの力・理解度と表現の力は別のものであると考えなければいけない。つまり，今回のような表現するという言語活動を単元の中に取り入れたことは大変価値のあることだと言える。表現の場を意図的に設定する必要性が明らかになった。

児童のワークシートより（９時間目／全９時間）



（３）児童が深く思考できるようにするためのワークシート

児童が書く活動の中で深く思考し，そして満足のいく文章を完成させられるように，ワークシー

トを次のように工夫した。

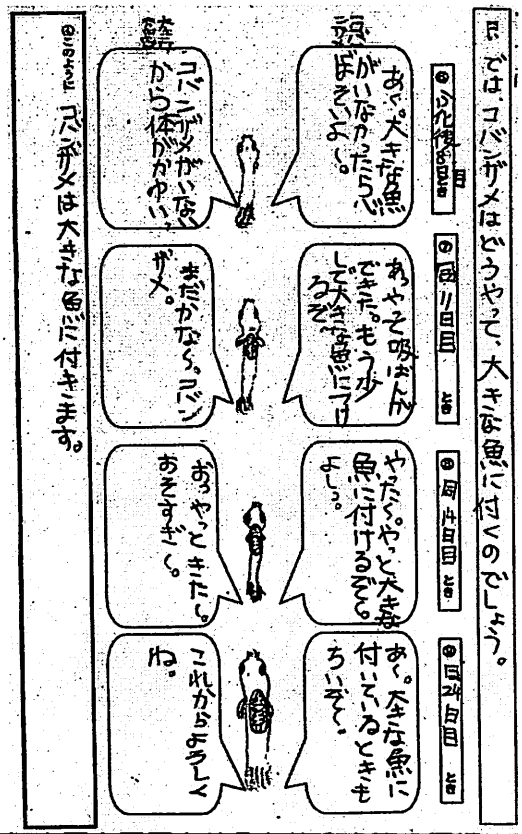
１点目は，教材文「ヤドカリとイソギンチャク」のまとめを行うワークシートと，自分の調べた生き物について書くワークシートを同じ形式にしたということである。段落を意識させて文章を書かせるにはそれなりの分量が必要であるが，前時と同じワークシートを使うことで，その心理的負担は多少軽減され，さらに見通しを持って活動ができたと考える。

２点目は，２つ目の問いも書くように設定したことである。２つ目の段落（ヤドカリはどうやって石に付いたイソギンチャクを自分の貝がらにうつすのでしょうか。）は時系列に沿って場合分けし，順序を説明している段落で，他の問いの問い－離れている場合－－緒にいる場合－答えというタイプとは違っているのだが，書けそうな人，想像できる人だけでいいから書いてごらんと，選択活動として取り入れた。もちろん書かずに終わった児童もいるが，資料で探し出したり，想像したりして果敢に挑戦し，見事な説明文を完成させた児童もいた。内容を時系列で整理する良さに気づけたことであろう。さらに，ある児童は「アリはアブラムシ以外の虫にみつをもらうのでしょうか。」「ツノゼミのとき」「タマカイガラムシのとき」「ヤマトシジミのよう虫のとき」という場合分けを行っていた。このように柔軟に活用して，場合分けという思考方法を一般化して使えていた児童もいた。

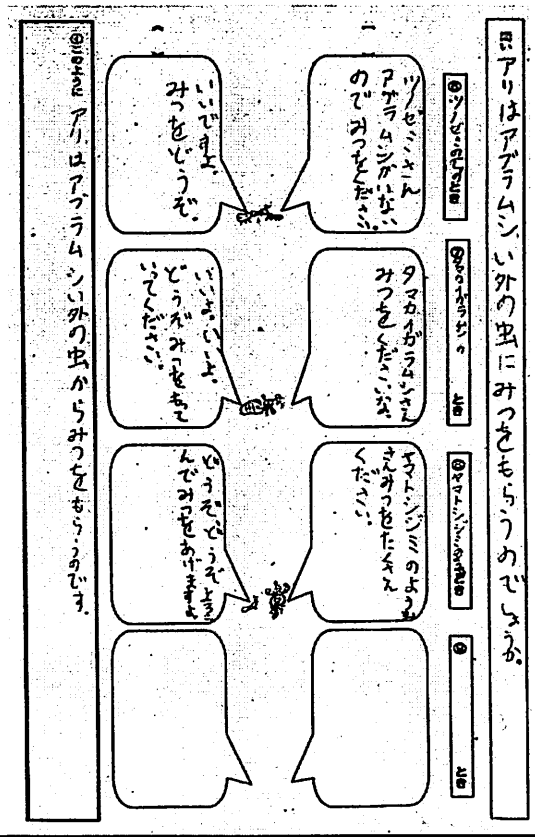
２つ目の問いを書くまでにはかなり時間を要した児童もいるが，結果を見ると一生懸命思考した後が見えるものばかりであった。難易度の高い課題であったが，取り入れてよかったと感じている。

児童のワークシートより（９時間目／全９時間）

A児　コバンザメと大きな魚の場合



B児　アリとアブラムシの場合



（４）内容を定着させるための交流・連携

目的ある言語活動の１つとして，本単元では内容を定着させるための交流や家庭との連携を繰り返し行った。教材文の音読，筆者の段落構成の説明，学習した内容の説明，自分が書いた文章の発

表である。児童は，ワークシートを見ながら保護者や友達に説明・発表することで学習内容を定着させたり，視野を広げることができた。

例えば，国語の時間があった日にはワークシートを持ち帰り，その日に学習した内容を家庭で説明し，内容について話し合ったり励ましの言葉をもらったりした。そうすることで学習内容を定着させることができ，さらに意欲を持続させることができた。児童は保護者のコメントを毎回心待ちにし，喜んで音読の宿題に取り組んだ。さらに，保護者からは，これまで子どもの読解力や国語の学習の様子はよく分からなかったが，この説明を聞くことで把握することができた，子どもと学習について話し合う機会となった，といった感想をいただき，家庭と連携して学習を進められるよさを実感している。

保護者のコメントより

・ヤドカリがイソギンチャクを貝がらにうつす様子は，絵で表すととても分かりやすかったです。ヤドカリの気持ちもおもしろくて，よく伝わってきました。
・イソギンチャクの気持ちになって考えたんだね。相手の立場になって考えることはこれからも大切だね。
・おたがいによいことがあるから協力しあえるんだね。助け合っておたがいが幸せになれるといいね。
・教科書に書いてあることを読むだけでなく，まとめたり，図で表したりすると，もっともっと分かりやすくなったね。
・身を守るためにヤドカリががんばっている様子がよく分かりましたね。どんな生き物も身を守るためにがんばっているんですね。
・生きていくために考えられた知恵だね。弱い生き物こそいろいろ考えていることがよく分かったね。

（5）課題

前述したような意図，積み上げをもって本時に臨んだが，課題もいくつも挙げられた。授業者自身が感じたものや討議会でいただいた御意見を以下に記す。

・筆者の問いの書き方を板書に示しておくと，どう書いていいか分からない児童の助けになった。
・ワークシートの順に考えていこうとする児童が多かったので，まず問いを作る，先に１つ目と３つ目の段落を完成させる，など取り組む順を助言することでもっとスムーズに活動できたのではないか。
・２つ目の問いを選択活動とするのであれば，ワークシートに後から貼り付けるなどの工夫があった方がよかった。２つ目の問いを書かなかった児童にとって空欄が残っていると達成感を感じにくい。
・発展的な学習（活用して表現する活動）は，得意な児童と苦手な児童がはっきり分かれるので，支援は教師だけでなく，児童同士，前時までの取り組み，資料の厳選などを心がけるべきだった。
・ヒントカードや文の書き出しがすでに印刷されているワークシートを準備するなど，書く活動が苦手な児童の手がかりになるような工夫があればよかった。また，時間を追って，板書にヒントが増えていくような方法で支援をしてもよかったのではないか。

（6）終わりに

以上のような成果と課題が明らかになった。何よりも児童が悩みながらも楽しんでこの学習に取り組んだことが授業者としては大きな成果であった。

あしあとカードより

私はたけださんのようなてほうしている文をまねしてかけたのでよかったです。またちがうことに使いたい！

たけ田さんの文しょうは、ありとイソギンチャクのことがよく分かったので自分のもかけました。

ありとイソギンチャクがよう助け合っている生物をまとめてたのしかったです。

たけださんと同じように文章を書けてよかったです。これからもがんばります。

次単元からも，児童にどのような「思考力・判断力・表現力」を身につけさせたいのか，その手立てをいかに設定すべきか，教師自身が明確に持ちながら，実践を続けていきたい。

8　使用図書一覧

NDC	書名	著者名	出版社	発行年
460	わたしの研究２　アリに知恵はあるか？	石井　象二郎　文 つだ　かつみ　絵	偕成社	1991 年
460	クローズアップ図鑑 さんごしょうの生きもの	J．バートン　写真 B．テイラー　文 武田　正倫　訳	岩波書店	1993 年
480	岩場の自然観察　磯と浅海の生きもの	磯貝　高弘	らくだ出版	1979 年
480	大自然のふしぎ　魚・貝の生態図鑑	川上　親孝　編	学習研究社	1993 年
480	科学のアルバム３３　いそべの生き物	川嶋　一成	あかね書房	2003 年
481	さんご礁のなぞをさぐって －生き物たちのたたかいと助け合い－	武田　正倫　著 大片　忠明　絵	文研出版	1990 年
481	クマノミとサンゴの海の魚たち	大方　洋二	岩崎書店	2007 年
481	月刊ポプラディア　2008 年　7-8 月合併号		ポプラ社	2008 年
484	野外観察図鑑６　貝と水の生物	内田　厚子　編	旺文社	1986 年
486	科学のアルバム７　アリの世界	栗林　慧	あかね書房	1972 年
486	大自然のふしぎ　昆虫の生態図鑑	伊藤　年一　編	学習研究社	1993 年
486	里山から高原，山地の自然② 共生する生きものたち クロシジミとクロオオアリの相利共生	蛭川　憲男　文・写真	ほおずき書籍	2008 年
488	大自然のふしぎ　鳥の生態図鑑	川上　親孝　編	学習研究社	1993 年